

78 おおみや す わ じんじゃせきぼう
大宮諏訪神社石棒



指 定 市有形文化財 昭和57年4月1日
所在地 入 沢
所有者 大宮諏訪神社



大石棒は、昭和8年（1933）頃旧青沼村が入沢・十日町線の道路改修工事を行った際、入沢字上磯部地籍の田口用水西側の石垣の一部分が改修され、その根掘りの際に土中から出土した。昭和9年（1934）4月15日祭典にあたり、当時の工事請負業者が大宮諏訪神社へ寄贈した。

入沢の谷川左岸扇状地のほぼ中央に、月夜平遺跡が所在しており、縄文時代前期から中期、後期、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代まで連続して集落が営まれた大遺跡である。大石棒の出土地は、月夜平遺跡内の北西端側の地点に位置し、このあたりは、磯部という地名に示されているように、昔、湖沼があったと伝えられ、湧水等のゆたかな水に恵まれた地帯であった。

大石棒は、長さ1.52m、直径17cmを測り、男根の形状が芸術的に形づくられ、きれいに研磨されている。佐久穂町北沢出土の石棒は、2.23mをはかり大きさの点においては日本一の大石棒であるが、入沢磯部出土の石棒は精緻な作りと形状の美しさにおいて日本一といえる。石材は、原産地の溶結凝灰岩（佐久石）を素材にしている。

石棒信仰は、縄文時代中期初頭（今から約5000年前）から顕現（明らかにあらわれる）した。形状と研磨された作りから、入沢の石棒は縄文後期に位置づけられる。月夜平遺跡は後期の遺物が最も多く出土しているが、この遺跡の集落のシンボルとして、南西に八ヶ岳、西に蓼科山を仰ぎ、北に浅間山、東に大久保山を望む台地に石棒を立てて、動植物の豊穰と集落の繁栄を祈って石棒信仰の祭祀がとり行われたものとされる。